

スピリチュアル・ライフと霊的戦い

□ 「スピリチュアル・ライフ（霊的な生き方）」に関する学び全体・・・8つのテーマ

- 第一部 聖書が示すスピリチュアル・ライフとは何か（定義）
- 第二部 スピリチュアル・ライフと 信者の生活ルール
- 第三部 スピリチュアル・ライフと 聖霊
- 第四部 スピリチュアル・ライフと 交わり
- 第五部 スピリチュアル・ライフと 弟子
- 第六部 スピリチュアル・ライフと 倫理
- 第七部 スピリチュアル・ライフと 神の導き
- 第八部 スピリチュアル・ライフと 霊的戦い

□ 「スピリチュアル・ライフと霊的戦い」のテーマで扱う4つの大項目

- I. 霊的戦いの3つの前線
- II. 十字架でのさばき
- III. 新しい性質【霊】に従って歩む
- IV. 古いもの 対 新しいもの

I. 霊的戦いの3つの前線

□はじめに

戦争では、敵との戦いは一度限りではないし、敵と対峙する前線も一つだけではない。霊的戦いも同様である。霊的戦いでは、前線は3つある。私たちの内側にある罪の性質、サタンと悪霊たちの軍団、そして世（よ）、である。

戦争では、戦場によって投入する武器も戦い方も変わる。霊的戦いも同様である。3つの前線それぞれにふさわしい対応の仕方がある。

私たち信者は、霊的戦いにおいて、自分が今どの前線に立っているのか、敵は何かを理解し、それに対処する適切な戦法と武器によって戦わなければならない。

□アウトライン

- A) 第一の前線：罪の性質に対する戦い
- B) 第二の前線：サタンと悪霊たちに対する戦い
- C) 第三の前線：世（よ）に対する戦い

A) 第一の前線：罪の性質に対する戦い

□アウトライン

1. 罪の性質を指す用語4つ：「罪」・「肉」・「古い人」・「罪のからだ」
2. 罪の性質を受けた人に対する神の処罰と、罪の性質が人に及ぼす作用
 - (1) 神の処罰：霊的な死
 - (2) 人に及ぼす作用
 - (3) 信者の希望：罪の性質が無くなる時
3. 霊的新生と新しい性質
 - (1) 霊的新生
 - (2) 新しい性質を指す用語3つ：「新しいいのち」・「霊」・「新しい人」
 - (3) 新しい性質の特徴
4. 信者の中での二つの性質の衝突
5. 霊は新生し、意志は変わった。信者に必要なのは、思考の一新
6. 二つの性質がそれぞれ結ぶ実
7. 罪の性質との戦いにおける戦い方
 - (1) 信者と不信者との違い：信者は新しい性質に従うことを選ぶことができる
 - (2) もし信者が罪の性質に従って個人的な罪を犯してしまったら、罪の告白（Iヨハネ1：9）
 - (3) 罪の性質との戦いに負ける時のパターン
 - ① 自分の行いによって、罪の性質を無くそうとか、小さくしようとして、逆に罪の性質に縛られてしまう
 - ② 罪の告白を怠って、神との交わりを回復できず、神からの力が来なくなる
 - ③ 常習的に罪を犯すようになって、罪の性質にコントロールされてしまう
 - (4) 戦い方の基本
 - ① 罪の性質は聖化の対象ではない。罪の性質は元々神が造られたものではなく、信者の肉体の死のときに、信者の霊魂からは消去される。よって、罪の性質には関わってはいけない。罪の性質を無くそうとか、小さくしようとしてはならない。それにはさわらずに、ひたすら、新しい性質に従うことを選ぶ。
 - ② 毎日、定期的に祈りの時間をもつ。天のお父様、と呼びかけたときに、告白していない罪があることを覚えたら、祈りの中でそれを言い表す。
 - ③ 常習的に罪を犯していたら、神との交わりも信者との交わりもできなくなる。祈ることもできなくなる。そして、天の父からの訓練を受けることになる。訓練が来たらそれを父からの訓練と思って感謝して耐え忍び、悔い改めて罪の告白をする。すると、常習的な罪から離れることができるようになる。再び、新しい性質に従うことを選ぶ生活に戻る。

1. 罪の性質を指す用語4つ：「罪」・「肉」・「古い人」・「罪のからだ」

(1) **罪 (つみ)**・・・3種類の意味がある。

- ① **罪の性質** : 造り主なる神を認めず自分勝手な生き方をしようとする性質
- 人は生まれるときから、親から受け継いでいて、誰もが内側に持つ。このため人は生まれたときから、「罪人 (つみびと)」である。
 - 神は清いお方である。罪人とは交わることはできない。神との関係は遮断されるので、人の霊は、神と関係をもてない。神から霊的に分離されたこの状態を、「**霊的な死**」という。
 - 人の内側に入り込んだ罪の性質によって、人の内側は汚され、暗くされて、その機能は損なわれている。
 - ロマ 6:6~7 *私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや**罪**の奴隷でなくなるためです。死んだ者は、**罪**から解放されているのです。* (補足 波線部「古い人」と「罪のからだ」も、罪の性質)
 - ロマ 6:11 *同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分**は罪**に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認めなさい。*
 - Iヨハ 1:8 *もし自分には**罪**がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。*
- ② **個人的な罪** : 個人が犯す具体的な罪。罪の性質が外側に現われたもの。
- 個人的な罪は、神のさばきの対象となる。各個人が犯す罪の軽重は、神のさばきによる罰の軽重に比例する。
 - 神のさばきは、「大きな白い御座のさばき」、いわゆる最後の審判である。さばきの結果、行先は「火の池」である (黙示録 20:10~15)。火の池に入ることは、神からの永遠の分離なので、これを「**永遠の刑罰**」(マタイ 25:46) という。また、肉体の死に次ぐ、「**第二の死**」(黙 20:15) とも言う。二つの用語を合わせて、「永遠の死」とも言う。
 - Iヨハ 1:9 *もし私たちが自分の**罪**を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その**罪**を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。*
 - 9節の「自分の罪を告白する」「その罪を赦し」は、複数形の罪、すなわち私たちが犯した具体的な罪を指す。

- ③ **転嫁された罪**：最初の人アダムの犯した罪が、神によってすべての人に転嫁されている。それにより、アダムが受けた罰である「**肉体の死**」を、すべての人が受けている。しかし、この不合理に見える転嫁は、人を救うための神の知恵である。それは、キリストの義を信者に転嫁し、永遠のいのちを与えるための前提である（ロマ 5：12～14）

④ **3つの意味の識別**

- ①の罪の性質を意味するときは、「罪」は必ず単数形の罪が用いられる。
- ②の個人的な罪を意味するときは、一つの具体的な罪を指す場合は単数形であるが、通常は複数形である。
- ③の転嫁された罪を教える箇所は、ロマ 5：12～14 である。

- (2) **肉 (にく)**・・・これも3種類の意味がある。

① **動物や人間の体**：

- I コリ 15：39 **どんな肉**も同じではなく、**人間の肉**、**獣の肉**、**鳥の肉**、**魚の肉**、それぞれ違います。
- ロマ 1：3 **御子は**、**肉**によれば**ダビデの子孫**から生まれ
- ロマ 8：3b **神はご自分の御子を**、**罪深い肉**と同じような形で、**罪のきよめのために遣わし**、**肉**において**罪を処罰された**のです。

② **人類全般または民族性**：

- ロマ 3：20 **なぜなら**、**人はだれも**、**律法を行うこと**によっては、**神の前に義と認められない**からです。サルクス=直訳「肉なる者は」
- ロマ 4：1 **それでは**、**肉**による私たちの父祖**アブラハムは何を見出した**、**と言えるのでしょうか**。

③ **罪の性質**：人間の内側に遺伝的にある性質で、造り主なる神を認めず自分勝手な生き方をしようとする性質。これも、聖書は「肉」と呼ぶ。

- ロマ 8：3a **肉**によって**弱くなった**ために、**律法にできなくなったこと**を、**神はしてくださいました**。
- ロマ 8：4 **それは**、**肉に従わず**霊に従って歩む**私たちのうちに**、**律法の要求が満たされるため**なのです。
 - 5～9節と12～13節の「肉」も、罪の性質を意味する。

- 波線部「霊に従って歩む」の「霊」は、信者が信じたときに聖霊から受けた新しい性質、あるいは、その新しい性質を受けて再生した信者の霊を指す。新改訳 2017 では「御霊に従って歩む」と訳されているが、原文はただ「霊」であり、御霊（神の霊、聖霊）を指しているわけではない。
- 「肉」は聖書では 3 つの意味を持ち、第一義的には人間の体を指す。そして、人間の体の内側には罪の性質があり、罪の性質は肉体を通して現れる。人間の体は、罪の性質の道具である。そのため、ロマ 8:3 が人間の体を「罪深い肉」と表現するように、人間の体と罪の性質とは一体となっている。ここから、「肉」という用語が、罪の性質そのものを指すようになった。

(3) **古い人**・・・古い人とは、最初の人アダムを指しつつ、罪の性質を意味する

- ① 創世記 3 章で、アダムが神の命令に反して罪に堕ちた。そのときから、人の内側に罪の性質が入り、アダム以降の人は遺伝的に罪の性質を持つ者として生まれて来る。「古い人」とは、最初に罪に堕ちた人を指しつつ、罪の性質を意味する用語である。
- ② 使われている箇所は次のとおり。
 - ロマ 6:6 私たちは知っています。私たちの**古い人**がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅ぼされて、私たちがもはや**罪の奴隷**でなくなるためです。
 - エペ 4:22 その教えとは、あなたがたの**以前の生活**について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく**古い人**を、あなたがたが脱ぎ捨てること、
 - コロ 3:9~10 互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは**古い人**をその行いととも脱ぎ捨てて、**新しい人**を着たのです。新しい人は、それを造られた方のかたちにしたがって新しくされ続け、**真の知識**に至ります。

(4) **罪のからだ**

ロマ 6:6 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅ぼされて、私たちがもはや**罪の奴隷**でなくなるためです。

この箇所では、「古い人」を「罪のからだ」とも表現している。

2. 罪の性質を受けた人に対する神の処罰と、罪の性質が人に及ぼす作用

- (1) 神の処罰：神からの霊的な分離、すなわち霊的な死
- (2) 人に及ぼす作用：悪いことをするのが罪の性質、ではない。**良いことでも悪いことでもすることができるが、それらを神から離れてしようとする性質**である。

- ① 神に頼らせない
- ロマ 4：1～2 行いによって認められようとする、自分を誇ろうとする
 - ガラ 3：3 肉によって完成されようとする
 - ピリ 3：3 肉に頼る
- ② 霊的に弱くして不法に向かわせる
- ロマ 6：19 **あなたがたの肉の弱さのために・・・自分の手足を汚れと不法の奴隷として献げて、不法に進む**
 - ロマ 8：3 **肉によって弱くなったため、律法にできなくなったこと**
- ③ 不信者の生き方のベースとなり、死のための実を結ばせる
- ロマ 7：5 **私たちが肉にあったときは、律法によって目覚めた罪の欲情が私たちのからだの中に働いて、死のための実を結びました。**
- ④ 人を支配し、人の肉体を道具にしようとする
- ロマ 6：12 **からだを罪に支配させる→からだの欲望に従ってしまう**
 - ロマ 6：13～14 14節・**罪が人を支配する→13節・人が自分の手足を不義の道具として罪に献げる**
 - ロマ 13：13～14 14節・**肉に心を用いる=罪の性質を刺激することになる必需品や用具などをあらかじめ準備する→欲望を満たそうとする→13節・遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活**
- ⑤ 信者を肉的にさせる（情欲や欲望をかきたてる）
- ロマ 7：14 **私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者**
- この箇所は、信者が聖化を自分の力や行いで達成しようとしたときに起きること。体が自分の内側を罪の性質に引き渡して、信者が罪の性質の奴隷に逆戻りするような状態に陥る。
- ⑥ 信者が良いことをしたいと願っても、それを実行できなくする
- ロマ 7：18 **私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。**

信者が良い事をしたと願うのは、霊的新生のときに、意志も変えられて、神のみこころに従いたいと願うようになったからである。しかし、実行できない。だが、ここから御霊の導きが始まる。詳しくは後で。

(3) 信者の希望：罪の性質が無くなる時

- ① 私たち信者はこの死ぬべきからだを一日も早く脱ぎ捨てて、栄光のからだをいただきたいと願う。それは、今のからだ年齢とともに朽ちていく体、病気や障害に苦しむ体だからであるが、それ以上に、罪の性質を内に残している体だからである。
- ② 栄光のからだをいただくことを、「私たちのからだを贖われること」(ロマ8:23)という。からだの贖いの日を待ち望みつつ、この地上の生活の中で、私たち信者は、自分のからだを「罪の性質」の道具としないように、祈りつつ歩んでいきたい。

ロマ8:22~24 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、**私たちのからだを贖われることを待ち望みながら**、心の中でうめいています。私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。

- ③ 信者の内側から罪の性質がなくなるのは、いつか。教会の信者の場合、次の2種類ある。
 - 第一に、教会の携挙の前に死ぬ信者について、である。彼らの内側から罪の性質がなくなるのは、死の時である。信者がキリストにあって肉体の死を迎えると、その霊魂は天のパラダイスに行く。そのとき、信者の霊魂の中には、もはや罪の性質はない。
 - 第二に、教会の携挙のとき地上に残り生きていて、死を経ずに栄光のからだに変換される信者について、である。彼らの場合は、変換により栄光のからだを受けるときである。そのとき、信者の霊魂から罪の性質は一瞬にして消去される。